

# 布施の心

11

## 【自動車産業の発展と私の仕事】

長崎新聞掲載／全3段(W378×H99)

一九六〇年、私は遅ればせながら人生で初めて正式に就職した。二十三歳だった。

仕事が面白くもあり、また、遅れを取り戻したいとの思いもあり、仕事と研究に没頭した。周りを見る余裕はなかつた。

しかし、振り返ってみれば、この頃の日本は経済も自動車産業も花ざかりの時代だった。

一九五〇年の朝鮮戦争の後、一九五〇年代半ばから、日本は自覚ましい経済発展を遂げ、高度経済成長期に入った。「もはや戦後ではない」時代に入りました。自動車産業も、一九五〇年にGHQが乗用車生産を認めただとたん、待ちかねていていたように活発に動き出し、政府の最大限の支援のもと、各メーカーが開発・販売競争を繰り広げ、モータリゼーションは急速に進展していった。

一九六〇年（昭和三五年）には、池田勇人総理大臣が「所得倍増計画」を高らかに打ち出し、経済活動に拍車がかかって、一九六四年（昭和三九年）には東京オリンピック、同年に東海道新幹線開通、一九七〇年（昭和四五年）には大阪万博もあり、日本経済はさらなる発展を遂げ、ついに一九六八年（昭和四三年）、日本はGNP世界第二位となつた。

国民は競つようくクーラーやカラーテレビなど高級消費財を買い求め、自家用車を持つこともステータスになつた。豪華で大きい車、コンパクトで実用的な車、速く走る車、デザインがかっこいい車など、さまざまなタイプの車が現れた。



高度経済成長期のイメージ(AI作成)

2023年3月本多産業株式会社は  
設立50周年を迎えました。

 本多産業株式会社

【本社】神奈川県横浜市戸塚区戸塚町3814

TEL:045-869-1133

【長崎工場】長崎県雲仙市吾妻町布江名677

TEL:0957-38-3520

本多 克也

(略字)

文・徳永 耕一

れて、まさに百花繚乱の状態だった。  
クラウン、スバル360、カローラ、フェアレディなどが登場したのもこの時期だ。

自動車メーカー各社は、競争に勝ち残るべく、海外メーカーとの提携も進める一方、技術開発や販売競争にしのぎを削り、中でも、トヨタと日産は熾烈な開発販売競争を繰り広げた。

私たちも、その大きくなつねりの一端にいて、より良い自動車装備品の開発に日夜取り組んでいた。

私の課題のプラスチックへの金属メッキは、具体的には日産グロリアのテールランプカバーということが、しばらくして分かった。

メッキの研究は、車の軽量化にも深く関係した。

金属は、鉄が重くてアルミは軽い。しかし、車をより速く、効率よく走らせるためには、アルミより軽い素材が要求される。

それを満たすのは金属ではなくプラスチックだが、プラスチック丸出しでは、高価な自動車が安っぽく見える。

そこで要求されるのが、プラスチックへの金属メッキなのだ。

岡野さんは、私にくどいくらい「テーマを決めたら、諦めずに粘り強く取り組め。結果は必ず出る」と叱咤激励してくれた。

その言葉を私は半信半疑で聞きながら、ミッショングに取りかかった。しかし、ミッショングは、想像以上に難しく、進めば進むほど、先が見えなくなつた。

「この霧が晴れる」とがあるのだろうか？それはいつだろうか？」

自分に問うてみた。